

先月行われたプロ野球ドラフト会議で指名を受けた本県出身2選手は中学校時代、いずれも軟式野球部に入らず中学生の硬式野球リトルシニアでプレーした。県内にリ

トルシニアチームが誕生してから15年たつが、出身選手のプロ入りは初。軟式野球部員が年々減少する一方、リトルシニアは各地に広がっている。

阪神ドラフト4位

遠藤(本庄由利)

リトルシニアが存在感

中学 県出身者、初のプロに

ソフトB育成1位

石塚(秋田南)

阪神4位の遠藤成内選手(仁賀保中・神奈川・東海大相模高)は本庄由利リトルシニア、ソフトバンク育成1位の石塚線一郎捕手(岩見三内中・岩手・黒沢尻工高)は秋田南リトルシニアの出身。高校はより高いレベルを求めて県外の強豪校に進み、ともに1年時からベンチ入りするなど順調に成長した。県内出身の高校生選手のドラフト指名は、2000年の広島5位の田村彰啓外野手(秋田商高)以来だ。

「選手が少なくて練習もままならなかった当時を思い返すと(ドラフト指名は)感慨深い。04年、秋田市に県内初のリトルシニアを立ち上げた大沢勉さん(71)が語る。能代高、日鉱日立を経て東映(現日本ハム)に入団した大沢さんは現役引退後に盛岡市で就職。次男が小学生対象のリトルで硬式野球を始め、小中学生のプレー環境に関心を持った。1990年代だった当時、本県に小中学生の硬式野球チームはなく盛岡市に通う中学生もいたという。

本県でも硬式野球ができるようにしたいとの思いから、55歳

で会社を早期退職して帰郷し秋田リトルシニアを設立。その後、07年に大館、08年に秋田北、09年に能代、10年に秋田南(現在は活動休止)、13年に本庄由利と各地にリトルシニアが誕生した。本年度は5チームに13年計138人が所属。来春には横手リトルシニアが開始する。

各チームに共通するのは「早い段階から硬式球に慣れさせて、高校で活躍する選手を育てる」というスタンス。中には高校1年夏にレギュラー」と高い目標を掲げるチームもある。本庄由利の吉野恵次監督(51)は遠藤について「中学生の時から硬式に触れ、高い意識で取り組みたのが大きかった。その結果、全国屈指の強豪でも力を伸ばせたのだろう」とみる。



ドラフト後、東海大相模高の門馬敬治監督と握手する遠藤(右)＝相模原市の同校



野球部の仲間と拳を上げて喜ぶ石塚＝黒沢尻工高



リトルシニア

日本リトルシニア中学硬式野球協会(東京)によるリーグ。東北、関東など各地に7連盟あり、東日本を中心に計550チーム約2万100人(4月時点)が加盟。協会規定で中学校軟式野球

部と掛け持ちはできない。主な大会は全国選抜(3月下旬、48チーム)、日本選手権(8月上旬、32チーム)があり各連盟で予選を行う。東北連盟の出場枠はそれぞれ5、3。西日本は「ボーイズリーグ」が主流で計607チーム約2万1500人(11月時点)が加盟。

一方、県内の中学校軟式野球部員は減少に歯止めがかけられない。09年度の43255人にに対し、10年後の本年度は22336人と半減に近い。近年は2、3校で合同チームを結成する例も珍しくない。

日本リトルシニア中学硬式野球協会東北連盟奥支部の後藤克雄支部長(73)は「(硬式、軟式にかかわらず)今後は選手不足で野球ができない子どもの受け皿にもなり得ると思う」と語った。

(間杉大旗)